

<前回：オリエンテーション・導入>

<授業の概要・目的>

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新たな展開の可能性について議論を行いたい。

そのために本講義では、キリスト教思想とその宗教哲学的基盤の探求というアプローチが試みられる。キリスト教思想の新たな展開には、こうした根本からの議論の組み立てが要求されるからである。2018年度後期は、これまでの講義内容を踏まえつつ、現代の宗教哲学において課題とされるべき諸問題について考える。

<成績評価>レポートによる。

<受講の注意事項>

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火3・水5）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

<「科学技術の神学」系>

「科学技術の神学」系を論じるには、次々に登場する科学技術とその影響について神学的な分析を行うことが求められるが、そのためには、科学・技術をキリスト教的神学的にいかにつまみ取るかが問題になる。・・・歴史的な諸キリスト教が包括する多岐にわたる立場と立論を視野に入れて「キリスト教的」に議論するために、聖書テキストから出発するという方針であった。同様に、「科学技術の神学」系を論じる前提となる、「キリスト教的」な科学・技術理解を明確化するためにも、聖書（創世物語）から科学・技術についての基本的見解を取り出すことを試みたい。取り上げられるのは、次の箇所である。

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。」（創世記1章27節）

「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」（創世記2章7節）

「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。」（創世記3章6節）

これらの三つの箇所（+それぞれの前後の文脈）から人間理解に関わるキーワードとして、①神の像／支配（創世記一章）、②土の塵／耕す／命名（創世記二章）、③墮罪（創世記三章）が取り出される。まず、①と②の二つのキーワードは、人間存在の有限性とまとめることができる——時間的な始まりは終わりを含意する——。その内、①は伝統的に「創造の善性」と解されてきたことからわかるように、人間存在の善性を意味するものと解釈することができ、②はその善性において遂行される人間の行為と理解できるだろう。「科学技術の神学」系という観点から注目すべきは、土を「耕す」（創世記2章15節）には「技術」へと現実化する可能性が、「命名」（創世記2章19節）には「科学」に発展する可能

性が見出されるという点である。世界の事象に名を与え、世界の事象を変化させる行為は、まさに科学・技術の原型というべき営みであり、ここから、聖書の人間理解に従えば、科学・技術は人間にとって偶然的なものではなく、人間存在の本質に属するものであるという論点が帰結する。人間は本来、耕す存在者、つまり「農民」であり、同時に命名する存在者、つまり「科学者」なのである。そして、これらの人間の営みは、神の被造物が、神の目から見て、すべて善なるものであるということ——「神はお造りなされたすべてのもをを覧になった。見よ、それは極めて良かった」（創世記1章31節）——のうちに置かれている。

しかし、①と②に対して、③は善なる本質の歪曲＝疎外を意味する。キリスト教思想には、人間存在を本質存在と実存存在という二つの規定によって論じる伝統が存在するが、これは以上の聖書の人間理解の哲学的解釈と考えてよいだろう。この聖書と哲学が共有する伝統的な人間理解は、現代神学においても受け継がれている。たとえばティリッヒは、この有限性と疎外（本質と実存）の二重性を、人間的生（＝人間の現実存在）の両義性と解釈する。人間の行為を善と悪のいずれか一方にのみ還元することは不可能であり、本質と実存の混合体としての人間の生の現実においては、善なる面と悪なる面とは不可分に結びついている。人間存在の両義性からは、完全な善人も完全な悪人も存在しないという人間の実相が見えてくる。

1. 「科学技術とキリスト教」系の補足1

—脳神経科学

1. 「心と脳の問題に関していえば、ハードな、つまり唯物論的な自然主義と、ソフトな自然主義とがある。ハードな自然主義のほうは宇宙の『すべてが』という意味で、宇宙は物質によってのみ構成されているとする。またソフトな自然主義のほうは、非物質的な意識の存在を容認するものの、それが脳を構成する物質には何の影響も与えないとする。脳神経科学が宗教体験に向ける挑戦は、ハードかソフトのいずれか一方の唯物論を前提にすることができ、しかもそのどちらを前提にしても矛盾を生じさせない。」（ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』法蔵館、2011年）

2. 科学と宗教の対立図式を超えて

・脳が本格的な科学研究の対象となったのは、1960年代頃からであり、1970年代には神経科学という学問分野が確立した。80年代にはMR I（磁気共鳴画像法）などが実用化され、神経科学は大きく発展する。90年代頃からは脳科学（あるいは脳神経科学）という言葉も定着するようになり、この間、脳科学を宗教現象に応用する試みも盛んになされた。アンドリュー・ニューベルクとユージン・ダキリによる一連の研究（チベット僧の瞑想時の脳の活動など）はその典型である。

・2000年頃までの研究成果を、ヒックはリタ・カーターに基づいて、次のようにまとめている。

①脳に対する刺激（パーシナガーのヘルメットによる前頭葉刺激や向精神薬の投与）はさまざまな宗教体験をもたらす、②空や無の意識は感覚器官からもたらされる情報がすべて遮断されたあとにも残存する意識が原因となる、③実在との一体感は個人の身体的境界

意識の遮断による、④神などの超自然的存在の感覚は二分された「自我システム」の一方が他方を別の実体と見るときに生じる。

・宗教体験を脳における自然的プロセスに帰着させる点で一致、ここから宗教体験は妄想であるとの主張までは決して遠くない。

・ヒック：2000年までの宗教体験についての脳科学的研究は、1880年代頃から20世紀にかけて（そして今日も）展開された「科学と宗教の対立図式」——典型は、進化論と創造科学の対立——に連なるもの。背後には、近代的な自然主義による宗教批判という知的伝統が存在。

・ヒック自身は、脳と心とめぐる議論を、心脳一元論（心の現象は脳内の自然的プロセス以外何物でもないとの主張）、心と脳の随伴現象説（これには多様な理論が含まれる）、心脳二元論（デカルト主義など）に分類した上で、心脳二元論を支持する。

・進化論論争におけるような科学と宗教の双方にとって不毛であった対立図式をいかに回避するかということ。二元論的な対立図式にとどまることはできない。

・「ゴッドスポット」（神を見る、あるいは神の声を聞くときに活性化する脳内の場所）が発見されたといった自然主義的な議論の多くは、キリスト教思想にとって重要な神の実在性の問題とは無関係であり、脳科学がもたらす最新の宗教論に一喜一憂する必要はない。また脳科学の周辺には多くの迷信がはびこっており、そういった怪しげな議論に振り回されないよう心すべきであろう。迷信というわけではないが、fMRI（機能的磁気共鳴画像法）が脳の活動自体を測定しているというのは典型的な誤解である。

3. 心の随伴現象説と創発理論

・心脳一元論、随伴現象説、心脳二元論の三つの立場は、心の哲学において心的因果として議論される。近代の自然哲学の伝統に密接に関連。

心脳一元論は心の哲学において一時期は多くの白熱した議論を巻き起こしたが、その後急速に衰退し、最近では随伴現象説に移行した（美濃正「心的因果と物理主義」、信原幸弘編『シリーズ心の哲学1 人間篇』勁草書房、2004年）。随伴現象説は、心脳一元論（強い自然主義）と心脳二元論の対立を超える自然哲学構築の試み。

・ヒックは随伴現象説（洗練された自然主義）として、「創発的性質、二重性質、機能主義など」を挙げる。これらは、心的性質をいかなる物理的性質とも異なる独立した性質として認めるが（非還元主義）、対象がいかなる心的性質をもつかは、それがどのような物理的性質をもつかによって決定される、つまり、心は独立した実在であるが、有機体である脳に依存するという点で一致している。

・随伴現象説は自然主義あるいは物理主義に属するものではあるが、近代的な自然主義とキリスト教との対立を乗り越える試みとして、キリスト教思想の側からも注目すべきものと言えよう。

・随伴現象説の中より創発性（emergence）に基づく議論を紹介。

クレアモント神学校のフィリップ・クレイトンであり、『心と創発性——量子から意識まで』（*Mind & Emergence. From Quantum to Consciousness*, Oxford University Press, 2004.）。

クレイトンは、本来物理的あるいは生物的システムで用いられた創発性概念——物質系から生命の創発（清水博『生命を捉え直す——生きている状態とは何か』（増補版）中公新書、1990年、に豊富な事例が示されている）——を、脳から心の創発へと拡張し、さ

らに神学的な問題領域（宗教や神性の創発）への適用を試みている。

・創発理論は、実在を諸レベル（諸次元）に区分した上で、下位のレベルに位置する系（例えば有機的生命システムとしての脳）内の諸要素間において複雑度が一定以上に達するときに、その系全体に新しい性質が創発し上位の実在のレベル（例えば心）が出現すると考える——たとえば、氷から水への相転移現象を思い浮かべていただきたい——。

・創発理論は、還元主義に対する全体論（ホーリズム）。上位の系の実在が下位の系の実在を前提とするという点では、自然主義に分類されねばならない。

・ドイツ観念論の自然哲学。

このタイプの自然哲学の問題は、この上昇を宗教あるいは神性まで辿るとき、それがキリスト教信仰の超越的な人格神というよりも、自然的な実在の延長線上の「神」に至る点にある。これはホワイトヘッド的な万有在神論にはふさわしい神概念であるとしても——実際、クレイトンは万有在神論に大いに関心を示している——、クレイトンの創発理論における神理解に対しては、バルト的な啓示と宗教との区別に立った批判が生じざるを得ないであろう。しかし、創発性を神まで延長するかは別にして、脳と心との間に創発的な関係を認めることは理論的に可能であり、十分に魅力的な提案と思われる。

4. 個体脳から社会脳へ

・fMRIによって観察された脳は、社会的相互作用のもとで活動している脳ではなく、人為的に他から隔離された個体脳なのである。宗教体験の研究といっても、それは具体的な宗教体験の抽象化にほかならない。脳科学による宗教の解明などは過剰な期待だったのであり、20世紀までの議論について多くの批判がなされたのは当然である。

・脳科学は21世紀に入り、個体脳から社会脳へと進展。宗教研究に対する脳科学の状況は大きく変化する。

社会脳とは「自己と他者の脳が作る社会を前提として、その社会に組み込まれた状態の脳のしくみをとらえる」という考え方（藤井直敬『ソーシャルブレインズ入門——〈社会脳〉って何だろう』講談社現代新書）、「霊長類の脳は社会的な環境をうまく処理できるように進化した」とする仮説（千住淳『社会脳の発達』東京大学出版会）であり、生きた宗教が関連するのは、この社会脳なのである。

・「脳の研究は20世紀後半から現在に至るまで、その研究を加速させてきたが、それは主として『生物脳（バイオロジカル・ブレイン）』の軸に沿った研究であったといえる。しかし、21世紀初頭から現在に至る10年間で、研究の潮流はヒトを対象とした『社会脳（ソーシャル・ブレイン）』あるいは社会神経科学を軸とする研究にコペルニクス的転回をとげてきている。」

・日本の社会脳研究では、私の知る限り、宗教経験をテーマ化するものはほとんど存在していない——社会脳研究どころか、そもそも宗教経験の脳科学的研究自体がまれである——。

・社会脳研究とキリスト教研究を直結させることではなく、両者を媒介する研究分野に注目すること。

・たとえば、母子関係に関わる実験。社会脳研究で重要な位置を占めている。なぜなら、多数の個体が関与する社会についての実証的実験を行うことは容易でないとしても、母親と乳幼児との間の二者関係についてはさまざまな実験が実施されており、また母子間コミ

コミュニケーションは人間の社会性の基盤であるという点で社会脳研究の基礎となり得るからである。そして何よりも、母子関係を典型とする基礎的人間関係——これは母子関係の独占物ではないとしても——が、宗教にも密接に関わることは発達心理学と宗教理論が共有する認識にほかならない。先に引用した藤井直敬の著書では、次のような指摘がなされている。

・「赤ちゃんとお母さんの身体は、胎盤内での間接的な血流交換を介してつながっています。・・・たとえそのときのお母さんを取りまく社会状況がどうであったとしても、身体の中では赤ちゃんに対する、無意識かつ無条件の存在肯定が見られます。」「最近特にさかんなのは、子育てと脳内の化学物質の関係性についての研究です。」「それでは、母親の与えてくれる関係とは何でしょうか。それは、存在そのものを無条件で認めるという態度です。」

・藤井：この無意識かつ無条件の存在肯定を「リスペクト」と名付けている。他者とのコミュニケーションにおける、相互の「承認」作業の基盤であり、宗教性の基盤であることは、神学者においても共有可能な認識で。

・「母親との共生的な結合関係から、E・H・エリクソンが同一性の議論に導入したいわゆる『基本的信頼』の現象が成長してくる。・・・信頼の基礎的な意味は、・・・人間がその後の発達の中で置き去りにしてしまう人格性の発達の幼児期の初期段階にのみ属しているわけではない。むしろ問題になっているのは、個人をその世界と結びつける共生的な関係の分化の基礎的な第一歩である。」(W・パネンベルク『人間学——神学的考察』教文館)

・無条件の存在肯定や基本的信頼の対極には、ミルグラム実験やスタンフォード監獄実験といった社会心理学の研究が示す人間のあり方が存在する。

・藤井によるまとめは次のようになる。

「ここでもたらされる結論は、人の倫理観は絶対的なものではなく、そのときの社会状況に応じていかようにも変化し、権威の裏付けがあるなら、何でもやりかねないということなのです。」

・権威に対する依存性とそれがもたらす責任意識の喪失は、人間の保守的傾向性ととも、脳が置かれた環境と無関係ではない。権威から自立し責任ある主体となり、さまざまな悪弊を変革するようになるには、人間の行動規範の座といえる脳の規範中枢において大きな転換がなされねばならず、それには藤井の言う「認知コスト」(時間とエネルギー)を必要とする。

・霊長類の中でも人間の脳の活動は大きなエネルギー消費を伴っており、「常にギリギリのエネルギー供給しか受けていない」脳は、そのコストの増大を嫌い保守的になるのは当然である。藤井に従えば、人間の責任放棄と思考停止は、たまたま発生するというよりも、脳のエネルギー状態を含めた人間存在の基本的傾向性と言わねばならない。その結論は、「わたしたちは、本質的にきわめて脆弱な倫理観と、無意味に保守的な傾向を持った生き物なのだ」ということになる。

・人間の二つの側面、つまり、人間の脆弱さ・保守性(過ちやすき人間)と、それに対するも共感的な人間の善意・信頼、という人間の両義性は、キリスト教的人間理解(原罪と創造の善性)と合致するとともに、脳の構造的な脆さと可塑性とも深く関わっている。

・友田明美『子どもの脳を傷つける親たち』NHK出版新書、2017年。

「不適切な養育」(マルトリートメント)による子どもの脳の損傷がうつや統合失調症などの病を引き起こすという指摘。「不適切な養育」と訳されるマルトリートメント(child maltreatment)は、1980年代になり児童虐待——身体的虐待、性的虐待、ネグレクト、心理的虐待——をより生態学的な観点から捉える際に用いられるようになった用語であり、こうした虐待が脳に傷を残すことは小児精神医学において問題となっている。

5. 展望——キリスト教思想にとっての意味

・脳科学はキリスト教にとって必ずしも敵対的なわけではないが、キリスト教的人間理解の科学的な証明を脳科学に求めることはあまりにも過大な要求。

・キリスト教的伝統において継承されてきた人間理解、たとえば、自由意志論や原罪説などは、聖書テキストにおける根拠の有無だけでなく、現代の人間理解との関わりにおいても再検討・再評価が求められている。この作業を具体的に遂行する上で、先に見た脳科学の提示する知見がキリスト教的伝統を見直す手がかりとなることは十分に期待できる。

・近世哲学における自由意志論や近代的な主体性論は、脳科学などの成果によって、その基盤が流動化しつつあるのである。

・より積極的には、キリスト教的な人間理解は、脳科学や社会心理学、発達心理学の見解と共鳴可能(デッド・ピーターズ)——同一視あるいは統合できるわけではないとしても——であり、それはキリスト教と現代科学との協力に必要な基盤として機能するものとなるかもしれない。

・現代のキリスト教思想に求められるのは、諸科学との一体化ではなく、さまざまな諸科学とともに、現代的課題に対し共同で取り組むためのネットワークの構築であり、その中に、社会脳研究へと展開された脳科学が位置するのではないだろうか。

<注>

(1) 二つの自然主義とキリスト教思想との関わりについては、芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』(晃洋書房、2007年)の第六章を参照。また、今回の議論は、私の次の研究に基づいている。芦名定道「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」(京都大学基督教学会『基督教学研究』第27号、2007年、1-19頁)、「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(星川啓慈・芦名定道編『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012年、19-61頁)、「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(井上順考編『21世紀の宗教研究——脳科学・進化生物学と宗教学との接点』平凡社、2014年、161-202頁)、「脳神経科学からキリスト教思想へ」(京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第2号 2014年、1-14頁)、「宗教哲学にとっての脳神経科学の意義」(宗教哲学会『宗教哲学研究』No.35、昭和堂、2018年、1-12頁)。

(2) 藤田一郎『脳ブームの迷信』(飛鳥新社、2009年)、伊勢田哲治他編『科学技術をよく考える——クリティカルシンキング練習帳』名古屋大学出版会、2013年、とくにユニット2)を参照。

(3) 荻阪直行「「社会脳シリーズ」刊行にあたって」。「社会脳シリーズ」(全9巻)とは、新曜社から刊行された叢書であり(2012-15年)、社会脳研究の広範な展開が示されている。また、脳科学とキリスト教思想を関係づけた研究としては、次の論考が参照でき

る。William, J. Shoemaker, "The Social Brain Network and Human Moral Behavior," in: *Zygon*, vol.47, no.4 (December 2012), pp.806-820.; Michael L. Spezio, "Social Neuroscience and Theistic Evolution: Intersubjectivity, Love, and the social Sphere, " in: *Zygon*, vol.48.no.2 (June 2013), pp.428-438.; Neil Messer, *Theological Neuroethics. Christian Ethics Meets the Science of the Human Brain*, Bloomsbury, 2017.